Osaka University Knowledge Archive

Title	英語等位構造の実証的研究
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43246
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	岡　田　禎　之（おか だ さだ ゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16507　号
学位授与年月日	平成13年9月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学　位　論　文　名	**英語等位構造の実証的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　河上　誓作 （副査） 教　授　大庭　幸男　　助教授　渋谷　勝己

論文内容の要旨

本論文は、英語の等位接続構造の言語現象がもつ形式的側面と意味機能的側面の対応関係を詳細に研究し、英語の等位接続にまつわる言語現象の解明にとっては、意味的・機能的な考察が不可欠であることを記述的・実証的に論じたものである。

本論文は、A4判総頁数306頁、400字詰め原稿用紙に換算して約918枚に相当する。全体は10章からなる。第1章では、意味機能的アプローチの紹介と、等位構造のもつ複雑さの例証として、可能な接続要素の組み合わせの問題が議論される。第2章から第9章までは、具体的な言語現象の分析である。

まず第2章は、接辞形態素の等位接続構造を取り上げる。例えば、internal and external という表現を、in-and external と表現することはできるのに、import and export を併せて*im-and exports とは言えないのは何故なのか。この構造が許されるのは、当該の接辞が意味的、音声的、形態的（綴字的）に「単語」と同等の要件を満たしている場合だけであることを実証する。

第3章は、アメリカ口語英語に見られる特殊構文の考察である。例えば、Go and visit the palace. は、Go visit the palace. のように、and を省略できる。この and の縮約現象は、二つの異なる出来事を一つの節表現としてまとめて表す場合に、述部動詞の構造配列上の距離が接近していればいるほど、当該の二つの出来事は概念的にもより密接な形で統合されていくという原則から説明される。

第4章は、再帰代名詞と分離先行詞の関係についての考察である。例えば、*John$_i$ told Mary$_j$ about themselves$_{i+j}$ は一般に容認されないのに対して、John$_i$ showed Mary$_j$ a picture of themselves$_{i+j}$ は非常に容認度が高い。本章では、単文によって表現できる出来事のタイプは、単一の出来事か、同一の複数の出来事であり、タイプレベルかトークンレベルか、そのどちらかにおいて「単一性」が守られていなければならないとし、この制約がこれまで謎とされてきた「再帰代名詞が分離先行詞をとれないのは何故か、また絵画名詞句に現れる場合には例外的に分離先行詞を簡単にとれるのは何故か」という問題を解くための重要な鍵になっていると論ずる。

第5章は、等位接続された名詞句や、複数名詞句と共起する respective/respectively の分布について、前者が個別的な順序づけが与えられていない名詞句を対応させる働きをもつのに対して、後者は逆に個別的な順序づけが既に成立している名詞句を対応させるために用いられるのは何故かについて明らかにする。本章では、文内でこれらの要素が影響を及ぼす範囲（スコープ）の違いという観点から詳細にデータを見直し、相補分布が生ずる理由を明らかに

している。

第6章と第7章は、and で接続された重文などによく現れる代用形の分布のあり方を、他動性の問題と関連づけて考察する。第6章では、do it と do so の分布の特徴を考察し、この二つの形式には他動性の度合いに関する差が明確に認められること、また、この二つの代用形が生み出す語用論的なニュアンスの違いは、この他動性の違いから生じてくることが議論される。第7章は、前章での考察内容を受け、節表現の代用形として生ずる it/so の分布の違いを取り扱う。これらは I believe it./I believe so. という形で登場するが、この場合にもやはり他動性の度合いが二つの選択肢の間で認められることを確認し、過去の文献における取り扱いの不備を修正する試みがなされる。

第8章は、等位接続構造に特有の削除現象である「空所化構文」を扱う。過去の代表的な研究のうち、特に空所化の問題を正面から取り扱った Neijt (1979) を中心的に取り上げ、その分析の問題点を指摘し、修正する。本章では、「義務的に削除される主動詞要素と共に削除することができる任意の要素はどこまでの範囲のものか」という観点からこの現象を検討し、情報価値の高さが削除可能性の問題と密接につながっていると指摘する。

第9章は、かつて Ross (1967) が唱えた等位構造制約に関わる現象を扱う。この等位構造制約は万能ではなく、例外が認められてきた。一つは、すべての等位項から同じ要素を等しく抜き出す全領域的規則適用の場合であり、もう一つは動詞句の等位接続構造が「手段と目的」を表す関係にあるときに、それを「真の」等位構造とは見なさず、「偽の」等位構造と考え、再分析しようとする場合であった。本章では、これらの制約や例外とする判断が妥当でないことを実証し、すべてのデータを説明するために、Kuno (1976) が提示した機能的制約に基づく独自の図式を提示し、容認可能な例とそうでない例の違いを区別できる新たな制約を提案している。

第10章は全体のまとめである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、タイトルの示すとおり、コーパスや著者自身による survey などのデータに基づく極めて実証的な研究であり、その点、理論の変更等によってその意義を失うことのない堅実な研究が展開されている。また、語形成のレベルから複文・重文、さらにはテキストレベルに至る英語の等位構造について、包括的な議論がなされていることも評価されてよい。さらに、本論文のように分析のレベルや対象が多岐にわたる場合には、その分析は、取り上げた言語事象ごとに個別的なものになりがちであるが、本論文の場合は、伝達機能と表現形式の iconic な関係の追及という意味機能主義的な立場を援用しているために、内部に一貫性が保たれている。本論文は、従来の形式的説明では十分説明できなかった「英語等位構造の形式的側面と意味的側面の対応関係の諸問題」を意味機能的アプローチにより解明した優れた業績である。

学界における評価については、本論文のいくつかの章が既に海外の専門誌に掲載され、本論文の水準が極めて高いことが認められている［2章 *Word* 50-3 (1999)、4章 *Journal of Pragmatics* 30 (1998)、5章 *Linguistics* 37-5 (1999)、9章 *Lingua* 103 (1997)］。出版された暁には、学界における英語の等位構造研究の重要な文献となることは間違いない。

以上のような本論文の優れた成果にもかかわらず、疑問点がまったくないわけではない。例えば、iconicity という概念は、transitivity 等と同じように、本来は程度性の概念である。しかし、一部を除き、挙げられた例文は適格文、不適格文と二分されていることが多く、その間の連続性が十分に検討されていないように思われる。また、インフォーマントとコーパスを用いて微妙な文法性の違いを示す例を挙げ、説得力のある説明を試みているが、反面、文法性の判断にかなりの揺れがあることも事実であり、「実証性」に疑問が残る部分がある。また、先行研究の提示に若干の冗長さが認められる。

しかしながら、これらの問題点は、この種の言語研究には必ず伴う課題であり、決して本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するには十分な価値を有するものと認定する。